

## おばあちゃん、ありがとう。

松川 皇

「いつもありがとう」をおばあちゃんに私は、言います。おばあちゃんも私に、

「皇ちゃん、ありがとうね。」

と笑顔で優しく言います。そんなおばあちゃんが、私は大好きです。

私には、おばあちゃんが一人だけです。お母さんのお母さんです。おばあちゃんは、八十一才で足と内臓が悪いです。去年は、一緒に旅行に行く事が出来ませんでした。月に二度、病院で色々な検査をします。入院もします。又、注射もよくします。太くて大きな注射です。去年の夏休みに私は、おばあちゃんが背中以太くて大きな注射をするのを初めて見ました。主治医の先生が、

「少し痛いから、おばあちゃんの手を握ってあげてね。」

と言いました。おばあちゃんは、

「皇ちゃんありがとう。」

と言って私の手を「ぎゅう」と強く握りました。三回、背中に注射をしました。おばあちゃんの手は、震えて私の手を「ぎゅう」と強く握っていました。注射が、終わると

「皇ちゃんが、手を握ってくれたから今日は少しも痛くなかったよ。ありがとうね。」

と優しく嬉しそうに言いました。「痛いのに。」「辛いのに。」なのに私の事を気にかけてくれるおばあちゃんに私の胸は、

「きゅん。」としました。お母さんは、私にいつも

「おばあちゃんに優しくしてね。今日出来る事は、今日してあげてね。明日にしないでね。皇ちゃんが後で悲しい思いをするよ。」

と言います。私は、その意味が注射を打っているおばあちゃんを見て少しだけ分かりました。おばあちゃんに百才以上、もっと生きてほしいです。

毎朝、おばあちゃんは、私の髪を編みながら私に言います。

「私は、いつまで皇ちゃんの髪を編めるかな。」

私はおばあちゃんに言います。

「いつまでも編めるよ。」

「ありがとうね。」

とおばあちゃんは、言います。

でも、本当は、私がおばあちゃんにおばあちゃんよりもっと沢山の「ありがとう。」を言わないといけないのです。おばあちゃんは、私の為に沢山の事をしてくれました。私は、おばあちゃんにまだ少しの事しかしてあげていません。だから、今日してあげたい事をして今、言いたい事を言います。そして、「ありがとう」の言葉を忘れません。

だから、おばあちゃんに今日も言います。

「おばあちゃん、ありがとう。私は、おばあちゃんが大好きよ。」